

猫とカボチャ・隠岐郡知夫村古海

令和2年11月3日掲載予定

収録・解説・酒井 董美 ただよし

イラスト・福本 隆男



語り手 家中カンさん（明治42年生まれ）
収録・昭和51年7月29日

あらすじ

とんと昔があつたげな。おじいさんとおばあさんが猫を飼っていた。おばあさんが大根を干していたら、「ばばよ、雨が降ってきたぞ」と、その猫が言った。おばあさんが「やれ、恐ろしや。こりや猫がものを言うようになったら、放さなきゃいけんぞ」。おじいさんとおばあさんは猫を放したのだ。おばあさんが麴などを買つてもどりかけたなら、紺の風呂敷を負つたきれいな女が出てきた。「おばあさん、われはおまえに飼われた猫だ。われを江戸の吉原へ売らんか」「おまやあ、吉原へ持つて行って売つたて、ニヤオウ言やあ、わしや困るだがや」「そげなことは絶対せんけえ、吉原へ売れば、たくさんのお金が取れるけえ」。おばあさんも猫の言うことを聞いて、猫を吉原へ持つて行って売つた。

そうしていたら、器量はよいし、お客はどんどんつくし、船頭が迷つて行つていたのに、その女がもう寝たと思つたのに、耳がピリッピリッピリッピリッと振れるのだ。こりやあ、人間の耳が振れるはずはない。船頭はそう思つて、またじつと見てみると、一時したらやはり耳がピリッピリッピリッと振れる。こりや、定かならぬ者だ」と船頭は、その女を殺したのだ。そうしたら、その女の帳場の者が船頭をいじめかけたのだ。しかし、船頭は、「もう少し待ちなさい。一時したら、どんな者になるか分からんけえ」と言つた。そうしているうちに、その女が大きな猫の死体になつて。それでそこへ葬つたのだ。まもなく、そのあたりから大きなカボチャが生えて成つた。そして船頭もまたそこへやつて来た。船頭はもともとカボチャが好きだったので、吉原の店の者が、その船頭に、「食え」と言つたところ、「そのカボチャは、どこから生えたか」と船頭が聞いたので、



https://kanbenosato.com/minwa/kancho_200805.html

「こうこうした」と答えたところ、「そりやあ、そこを掘つて見んや承知せん」と船頭が言つたので、掘つて見たところ、猫の頭のところからカボチャが生えていた。もしそれを船頭が食べれば、命を取られるところだつた。けれども、船頭もえらかつたので、食べなかつたのだ。それ以来、「自然生えのカボチャは食べることはできぬ」ということになつたのだ。そのこんべのは。

解説

関敬吾博士の分類を借りると、二つの話がいっしょになつたものといえる。両者とも「本格昔話」に属しているが、前半部は「動物報恩」の「狐遊女」の話で、ここでは狐が猫となつて語られている。また、後半部は「愚かな動物」の「猫と南瓜」の話である。そしてこの二つが合体して今回の話が成立しているのである。伝承の過程で昔話もこのような離合集散が見られることもあるのである。（元島根大学法文学部教授）